

## 『京都の大殉教を想う新しい福音宣教』パート2

### ～現代の殉教「丸血留」を生きる～

京都司教 パウロ大塚喜直

#### 1. 「ペトロ岐部と187殉教者」列福の年

新年明けましておめでとうございます。今年も京都教区の全ての信者で、『みながひとつになつて』（司教のモットー）共同宣教司牧を推進していきましょう。

昨年6月1日、教皇庁列聖省は教皇ベネディクト十六世の認可を得て、「ペトロ岐部と187殉教者」の列福を承認し、9月には列福式が本年11月24日（月曜日）長崎で行われると発表しました。

私は昨年に引き続き教区の今年のテーマを「京都の大殉教を想う新しい福音宣教」とし（パート2）、『日常からミサを生きる』京都教区が、列福される殉教者の信仰を模範にして、「新しい福音宣教」に取り組む決意をあらたにしたいと思います。

#### 2. 「新しい福音宣教」のための部会制の充実

京都教区は、2001年に全56小教区に『共同宣教司牧』を導入し7年が経過しました。そして、2003年から足掛け5年をかけて取組んだ「小教区評議会の規約作り」は、昨年末で終了しました。理解と協力を惜しまず示してくださった皆様に感謝します。本当に、ありがとうございました。これで、「新しい福音宣教」を担う教会の運営と活動を共同宣教司牧の精神で実行する形が整いました。これからの課題は、動き出した部会制をどのように軌道にのせていくかです。部会制が目指している「共同体のみんなが教会の活動を担い福音宣教していく」という目標をしっかりとらえて、部会制が定着するよう各教会で工夫していきましょう。

#### 3. 「京都の大殉教を想い、ともに祈る一年」

私は、昨年の「京都の大殉教」の記念日である10月6日から今年の列福式（11月24日）までの期間を、「京都の大殉教を想い、ともに祈る一年」としました。目的は「京都の大殉教」の列福決定を感謝するとともに、「ペトロ岐部と187殉教者」、特に「京都の大殉教」についての歴史を学び、当時のキリシタンの信仰と殉教者のこころを想い、私たちが「現代の殉教」を引き受ける心構えをつくることです。私は、殉教者の学びのために、「**京都の大殉教 1619年10月6日**」（結城了悟、日本26聖人記念館 発行、2007年第3版）と、「**ペトロ岐部と187殉教者**」（カトリック中央協議会、殉教者列福調査委員会、2007年）の2冊を教区の皆様に送りました。どうぞ、よく読んでいただき、それぞれの殉教者について歴史的事実と背景を学び、かれらの生き方に想いを馳せてください。

また、教区では「京都の大殉教」列福記念事業特別委員会を設置して、教区全体で「京都の大殉教」の列福を有意義に祝うためにいろいろな記念事業を企画しています。これらの活動のために皆様から特別献金をお願いしたいと思いますので、どうぞご協力ください。

また、各地区協議会・ブロック・小教区等でも、殉教者を記念するために自主的に活動してください。

#### **4. 現代の殉教「丸血留」を生きる**

キリシタン時代、ラテン語の「殉教」が「丸血留（まるちる）」という当て字で綴られていました。この「丸血留」には、殉教者の信仰と心情がみごとに表われています。厳しい迫害を受けパライソをひたすら望んで全てを耐え抜いた殉教者たちは、自らのすべて（丸ごと）を捧げ、命を賭して（血を流して）信仰に踏み留まったのです。

現代の私たちにとっての迫害は、権力者によるものではありませんが、それにもまして巧妙に忍び寄ってきます。世間にはキリスト教の信仰を徐々に周辺に押しやる考えが蔓延しています。「私がよければ、それでいいじゃないか」といった主観主義や、「人に迷惑かけなきゃ、いいじゃないか」という道徳的相対主義、さらに「この世の中、なにも確かなものなんかないよ」というニヒリズム（虚無感）の形をした価値観の危機といったものが、人々を神不在の生き方へと誘惑していきます。このような現代の誘惑は教会の外部からよりも信者の内側をとおしてやってきて、いつの間にかキリスト者自身が求める救いそのものが世俗化されはじめています。これが、私たちが直面している新しいタイプの迫害です。この世俗の時代の「精神の迫害」といったものに打ち勝つために、私たちは今まさにキリシタンの「丸血留」のこころを思い起こすのです。

#### **5. 「丸血留」の心・謙遜**

殉教とは、恐ろしい拷問に耐えて死んだというところのみ偉大さがあるのではありません。信徒であれば誰しも「いざというとき、自分は殉教するだろうか」と考えますが、多くの方は、自分は弱いから殉教など決してできないと言うでしょう。確かにそれは正直ですが、それでは殉教者のことをひとつも理解していないことになります。実は人はだれでも、自分は殉教する覚悟があると公言できるものではないと思います。しかし、迫害に直面し最後に殉教者になった人たちは自分の精神の強さのゆえではなく、神への信頼と恵みによって決断できたのです。自分の努力ではなくひたすら神により頼むこと、この神への信仰があったからこそ、いざというときに殉教は人間の決断となったのです。

#### **6. 宣教のための奉獻としての殉教**

殉教者の原点はキリストの死です。キリストは自分を救わず、ただひたすら愛する他者の救いのためだけを考えて生きました。その究極の終着点が十字架の死でした。しかし、忘れてならないのは、そのキリストの生き方と死は、御父のみ旨を果たすためであったということです。つまりイエスの死は、御父のみ旨に従って神の愛を証しする宣教のための奉獻であったといえます。カトリック教会の歴史における数々の殉教も、この宣教のための奉獻の一つの形であり、殉教者たちは殺されても恐れない自分の信仰の強さや勇敢さを証

明するために殉教したのではなく、神の存在、神のあわれみ、神の愛の証のために命を捧げたのです。

したがって、「現代の殉教」には3つのポイントがあります。第1は、「イエス・キリストを宣言する」ことです。信仰者の証しの生き方は何でもよいのではなく、キリストによる救いを信じ、永遠のいのちに希望をかける愛の生き方です。第2は、信仰者は「自分の死をかけるほどの確固たる信念をもって生きる」ことです。生ぬるい信仰を常に回心します。そして第3は「隠れて生きないこと」です。信仰というのは黙って自分だけ信じていればよいというものではなく、神がくださる信仰の恵みから証しの使命を取りさることはできません。

## 7. 自分に与えられたものを主に返す

聖アウグスチヌスは殉教者について、次のような説教をしています。「殉教者の死を買い取った代価は一人の方の死です。この一人の方の死は、どれほど多くの人の死を買い取ったのでしょうか。もし、その死がなかったら、一粒の麦が多くの実を結ぶことはなかったでしょう。殉教者たちは、自分に与えられたものを主に返したのです」。

この「自分に与えられたものを主に返す」ということは殉教者だけではなく、すべての人に当てはまります。人はそれぞれ違った仕方であっても、自分に与えられたものを主に返すのです。別の言い方をすれば、殉教には「死ぬ殉教」と「死なない殉教」があると言えます。どちらも神に捧げる人生です。私たちはふだん自分の人生を自分のものだと考えています。でも本当にそうでしょうか。自分のものでありながら、その初めも終わりも自分の自由がきかず、自分の力の及ばないものなのです。人はキリストのあがないによって救われ、その人生は神からいただいたものなのです。

## 8. 神との約束を生きる

人には生まれつき、神の愛に応えるという課題があります。この神の愛は、イエス・キリストの十字架の死において完全に啓示されました。私たちキリスト者は、人生が人の意思や努力を受け付けられない宿命といったものではなく、キリストに倣って人生を「神が人間に注がれる限りない愛にいかに応えて生きるか」という視点でみることができます。殉教者たちは、信仰のために自分の命を捨てることで神に愛されたことを証明しました。殉教者のその死に方に表れた「生き方」は、神との約束を生きたとと言えます。

人の一生は不可解で神秘です。人は苦しく辛い出来事に襲われ、生きがいどころか生きる力も意味も失い、絶望のふちに追いやられることがあります。また、それほど深刻でなくとも、なぜ私がこんな目にあうのか、なぜ私は不幸なのか、なぜ私は自分の意志に反してこれをしなければならぬのか、と自分が分裂してしまうときがあります。その時にこそ私たちは洗礼の約束のとおり、神の愛と力に信頼し、それに応える約束を思い起こすのです。

## 9. キリストに従う勇氣

故教皇ヨハネ・パウロ 2 世が晩年高齢になり病氣も抱え、ある記者から引退の意志を問われたとき、「キリストは十字架から降りなかった」と答えられたというエピソードがあります。教皇様は神に捧げた人生を、またその使命を最後までやり遂げる確固とした思いをお持ちでした。私たちキリスト者は、純粹にキリストに従うことを望み、憧れ、その道を探しています。それは時に苦しく、辛く、人間には不可能と思えることがあるでしょう。しかし、私たちの教師であるキリストの生き方とその十字架の姿を思い、教皇様のように強い意志をもってキリストに従う勇氣と謙虚さが必要なのだと思います。私たちも「神への奉獻を生きる」のです。主である神からの招きにどう応えるか。出来るだけよく応えるか、それともあまり応えないか、全く応えないか。信仰はある意味で、自分の人生を切り開く唯一の道なのです。

## 10. 永遠のいのちを目指して『日常』を生きる

当時の京都のクリシタンたちは、あの南蛮寺とよばれた聖堂でどんな思いでミサにあずかっていたのでしょうか。殉教者たちは、殉教者になるために信仰を生きたのではありません。殉教者たちは、苦勞と嘆きとつかの間の喜びのつまった生活の中で、自分の「この世のいのち」と引き換えに生きている「永遠のいのち」があることを決して忘れなかったのです。

殉教という奉獻は、毎日の生活での神への賛美と感謝の祈り、家族と分かち合う生活の苦しみ、日々の労働、隣人への奉仕にこめられた『日常』での信仰生活があったからこそなしたことでした。パウロは言います。「自分の体を神に喜ばれる聖なる、生きるいけにえとして捧げなさい」（ローマ 12・1）。キリスト者の奉獻は毎日の生活全体なのです。これが『日常からミサを生きる』というテーマが意味しているものです。しかし、同時にミサはある意味で『日常』を越えた、自分の人生の最後の時、救いの時を前もって生きている荘嚴な儀式です。殉教者となった人たちは、こうして永遠のいのちを目指して日常から生きていたのです。だから、迫害に直面したとき信仰を捨てずに、永遠のいのちを選ぶ究極の選択ができたのでした。

## 11. 福音的決断

この世の富も名声も出世も、経済的に豊かで便利な暮らしも、それ自体は悪いことではなく、人間の福祉の向上に役立つとも言えます。しかし、それらの追求と、人間のいのちや人権、環境、平和など、普遍的な価値のあるものや福音的な生き方と対立するときどちらを選ぶかが問われるのです。家族のために、困っている人のために、虐げられている人のために、正義のために、平和のために、今持っているお金も手放し、持てるであろう楽な生活も投げ出して、人はすべてを犠牲にしてでも選択すべきことがあります。またその時があります。

神の愛を選択する機会死ぬまであります。神からいただいた命を豊かに生きるか、粗

末に扱うか、その誘惑はあらゆる選択に潜んでいます。すべての人を愛する心もち、祈りと回心でそれを培い、いざというときにどんな犠牲をはらってでも神の愛を選択するか、拒否するか、本当の迫害はまさに身近にあるのです。鴨川の六条河原で 27 本の十字架に連なった 52 名の殉教者たちは、神への愛を選択する機会を逸せず、確かな決断によって永遠のいのちへの栄光の道を昇っていきました。

## 12. 『使徒聖パウロ年』を迎えて

教皇ベネディクト 16 世は使徒聖パウロの生誕 2000 年を記念するために、2008 年 6 月 29 日「聖ペトロ・聖パウロの祝日」から 2009 年同祝日までを「使徒聖パウロ年」と制定されました（注1）。パウロは「神の恵みを無駄にはいけません」と繰り返し言いました。私たちも「ペトロ岐部と 187 殉教者」の列福を記念しながら、自らの信仰の恵みを無駄にすることなく、「新しい熱心、心構え」、「新しい方法」、「新しい表現」での「新しい福音宣教」に、「丸血留」の精神で派遣されていきましょう。「殉教者の血は教会の種子となる」（マルチリオの勧め）のです。私たちも「現代の殉教」を雄々しく生きて、次世代の日本の教会に「丸血留」の心を継承していきましょう。

今年も京都教区の福音宣教の歩みを聖母マリアの取次ぎによって父である神様におささげし、平和の元后であるマリアさまを通して「世界の平和」のための祈り続けましょう。

2008 年 1 月 1 日 神の母聖マリアの祝日

（注1）ベネディクト 16 世教皇は、2007 年 6 月 28 日、聖ペトロ・パウロの祝日の前晩の祈りの説教で発表された。なお、聖パウロの生年については、歴史家によって紀元 7 年から 10 年の間としていると言及された。